



# 広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻  
京都大学医学部人間健康科学科



3名の博士(人間健康科学)が誕生しました

## 目次

○人間健康科学が目指すもの	専攻長 椎 名 毅… 2	リハビリテーション科学コース 助教 長谷川 聡…18	看護科学コース 助手 田 中 真 琴…19
○退任等挨拶	元看護科学コース 教授 櫻 庭 繁… 3	○第24回(2011年)健康科学市民公開講座	検査技術科学コース 足 立 壮 一…20
元検査技術科学コース 教授 藤 田 正 俊… 4	元検査技術科学コース 准教授 池 本 正 生… 5	○2011年度オープンキャンパス	検査技術科学コース 足 立 壮 一…21
元看護科学コース 准教授 作 田 裕 美… 6	元看護科学コース 助教 白 井 香 苗… 7	○人間健康科学系専攻から博士が3名誕生しました…23	○課程時代を振り返って 砂 川 陽 一…24
元検査技術科学コース 特定助教 布 樹 輝… 8	元看護科学コース 助手 中 堀 裕 代… 9	○大学院生活を振り返って 亀 田 知 美…25	○人間健康科学系専攻博士後期課程を終えて 永 井 宏 達…26
○新任等挨拶	看護科学コース 教授 若 村 智 子…10	○人間健康科学系専攻・人間健康科学科	平成24年度入学試験結果及び
リハビリテーション科学コース 教授 山 田 重 人…11	看護科学コース 准教授 廣 島 麻 揚…12	平成23年度修了・卒業者数…27	○平成23年度卒業生の進路調査結果…29
看護科学コース 講師 滝 澤 寛 子…13	看護科学コース 講師 古 川 亮 子…14	○人事異動…30	○日 誌…31
看護科学コース 講師 山 田 純 栄…15	リハビリテーション科学コース 講師 山 田 純 栄…15	○あ と が き…33	
リハビリテーション科学コース 助教 岡 橋 さ や か…16	看護科学コース 助教 志 澤 美 保…17		



## 人間健康科学が目指すもの

専攻長 椎名 毅

人間健康科学系専攻は、28年間の医療技術短期大学部の時代を経て、9年前に医学部保健学科へ改組され、その5年後に人間健康科学科に改称、さらに1年後に博士後期課程設置と、ここ数年で大きく発展してきた。そして、今年の3月には、晴れて博士(人間健康科学)の1期生を送り出すことができた。

前身となる組織の歴史の長さからすれば、本専攻での博士課程設置は遅く、実際27の博士課程を持つ国立大学医療系大学院の中で23番目である。一方で、本専攻は他にはない、いくつかのユニークな面を持っている。その象徴は、専攻名であり、「人間健康科学」を標榜しているのは京都大学の本専攻のみである。また、検査技術科学コースにおける情報理工医療学講座、博士後期課程における分野横断型の近未来型人間健康科学融合ユニットは、他にはない特色と言えよう。一方で、他に類を見ないというのは、認知度の向上、アイデンティティの確立が重要で、そのための努力を強いられるのは世の常である。

改めて、人間健康科学の目指すものとは何かを考えると、それは設立時の理念として明確に示されている。すなわち、本専攻においては人の真の健康を創生するため、医学をはじめとする自然科学並びに人文・社会科学を基盤として全人的視野に立って医療・保健・福祉を深く考察した人間健康科学を追究し、その理論の構築と、実現のための技術の確立、そして実践へと展開する。そして、そのミッションは、からだところの健康を維持・増進を目指し、高度先進医療を駆使して疾病を cure に導くとともに専門的 care を自ら提供し、指導できる高度医療専門職の育成と、先進的医療技術や医療機器の開発、さらに地域生活支援のための施策の企画や保健医療福祉システムの構築など、高度でかつ学際的、革新的な研究の推進と、研究者の育成を目指すことである。

このように、キャリア選択の面でも、人の真の健康の創生というキーワードのもとに、高度医療専門職から、研究者、企業での開発者、プランナーまでかなり幅広くカバーすることになる。今後、チーム医療により、多種多様な医療スタッフが、高い専門性に基づいて目的と情報を共有し、業務を分担するとともに、互いに連携・補完しあい、患者の状況に的確に対応した医療を提供する必要から、高度医療専門職育成が一層重要となる。高度医療専門職育成のための教育には、実習を中心とした医療現場との連携が不可欠であり、この点で、本専攻は附属病院と隣接している強みを、もっと生かすべきと言えよう。

医療の質の評価基準の一つとして、平均の在院日数が用いられるが、我が国の平均在院日数は、図1のようにOECD加盟国の中では最長である。しかし、我が国でも、今後より侵襲性の少ない外科的処置の普及や、自宅での退院後の治療を受けられる早期退院プログラムの拡大などで、在院日数の減少が進んでいくのは確実で、その場合、在宅医療の必要性が高まる。これは、在宅で検査できる非侵襲で簡便な検査・診断機器の開発、在宅医療に適した看護、リハビリの技術・プログラムの開発、地域生活支援のための施策、保健医療福祉のシステム改革など、まさに人間健康科学の研究や人材が不可欠となることが期待される。

表1 急性期病床における平均在院日数の国際比較(OECD: Health Data 2005より)

(単位:日)

	日本	ドイツ	フランス	イギリス	アメリカ
1995年	33.2	11.4	6.2	7.0	6.5
2003年	20.7	8.9	5.6	6.7	5.7

このような幅広い分野での活躍を期待する人材育成は、医学だけでなく工学、理学、人文学等を基盤として全人的視野に立って人間健康科学を考えるという人間健康科学の理念を反映した結果である。そのためには、入口も幅広くし様々な分野からの学生を募るのが理想的である。折しも、文部科学省では、大学改革実行プランとして、大学教育の質的転換、グローバル化、研究力強化などの方針を打ち出している。特により活力ある大学教育のため、入試制度の改革が必要としている。そのような視点から、本専攻でも、より幅広い人材を集めうるための入試とそれにリンクした教育体制を整備し、今後、超高齢社会において重要となる人間健康科学の各分野で幅広く活躍できる人材の育成を目指すことが必要と言える。

## 遥かなり 東路から京路へ

元看護科学コース 教授 櫻庭 繁

平成 15 年 4 月、浜松医科大学の寺尾俊彦(産婦人科)学長のご了解を得て京都大学保健学科に来ました。それまで関西に馴染みのなかった私は、地の利もなく、旧知の人は山形大学以来の桂敏樹先生と祇園お茶屋のご夫妻だけでした。お茶屋の女将は虎の門病院の元総婦長、当時は千葉大学の卒業生をごっそり連れ去ってくださって、私は千葉大学附属病院から叱られました。そしてご主人は元メヂカルフレンド社編集長、そんなご夫婦には学生の就職や教科書の出版でとてもお世話になり、唯一歓迎していただきました。

着任当時は短期大学部生への講義から始まりましたが、私の研究室といえば、8 畳位の部屋に大きな書棚となぜか 2 冊の参考書。古びた机、大きめの合わない椅子という体たらくで、仕事はロッカーの錆落しから始まりまして。敷居のない隣室にはりハビリ用の大きなお風呂と脱衣所があり、大学院に向けての本格的な全面改築までは筒抜けの教職員の笑い声だけが響いていたことを覚えています。一方、精神看護の教員は私一人、市内 5 か所の実習先で朝の申し送りから学生を参加させましたが、看護の先生方からは反発もありました。これは、過去の疾患看護から抜け出られず、なおざりにされてきた障害者(特に精神障害者)看護教育についての負の遺産であったように思います。

そうしているうちに保健学科として 4 年の完成年度をまたない中で大学院修士課程、さらに博士課程と、今日の姿を整えてきました。このことは皆さんもご存じのところですが、修士課程の開設時は笹田昌孝学科長(当時)の下、事務の方々も一緒に盛大に開設記念式典を執り行ったことは忘れられません。京都大学交響楽団や関西 21 世紀交響楽団の皆様には記念講演を飾る素敵な演奏も披露していただき、歴代総長、来賓の方々からも絶賛していただきました。この大成功の行事の陰には、当時総務掛長であられた加藤泰久さんや教務掛の中谷玲子さん、楽団スタッフの川島宗子さん等々、多くの皆様に幾度となくご足労をおかけしました。特に加藤さんは、ありとあらゆる準備で大学に泊まり込んでまで働いていただいたことも記憶しています。さらに博士課程設置の準備も兼ねて、必要不可欠な研究費獲得ためにご寄附を募ろうと福田善弘先生とご一緒に京都府下の企業団体を訪ねました。同窓会、OB 教職員等にもお願いし、これらご寄附者の皆様には感謝の意を込めて正面入り口左側に銘板を設置しています。こうして京都大学の一学科としての研究・教育システムと研究環境は順次整備されていきました。ただ新建設とはならず改築改装の連続ではありませんが。

振り返れば、私の教員生活は 36 年になろうと

しています。送り出した卒業生達も大活躍しているようで頼もしい限りです。全国の看護系大学で精神看護の教鞭をとっている教員の 1 割近くを前任校での卒業生が占めています。京大でのゼミからは大学院生 5 名、卒業研究では十数名の学生が巣立ち、経産省のキャリア官僚も誕生しました。現在 2 年目で本省の係長です。みなさんの将来が楽しみです。

さて、平成 23 年 6 月、私は 63 歳の誕生月をもって京都大学を退職し、京都光華女子大学に赴任しました。この大学は西大路五条から西に行った葛野(カドノ)大路五条にあり、創立 70 周年を迎える文系の大学で今年 4 月から看護学科が誕生しました。京都市内の私立大学では 3 校目の看護学部として、教職員一同努力しているところです。生き残るための秘策を練っていますことなどは、京都大学では想像もつかない世界かもしれません。

私にとって看護学科の開設時の赴任は千葉大学に始まり、浜松医科大学、京都大学、そして京都光華女子大学と、気づけば 4 校目です。そんなことを回想しつつ、芭蕉の「山路来てなにやらゆかしスミレ草」のように野辺に咲く一輪のスミレ草のような存在にもなればと願う昨今です。それとモーツァルトのピアノ協奏曲第 20 番があれば十分です。

それにしても退任の際に己の業績を述べるほど浅はかで見苦しいことはありません。唯一の心残りは、皆様一人一人に、「大変お世話になりました。有難うございました」とご挨拶ができなかったことです。浅学非才の私が京都大学で教鞭がとれましたのは皆様のおかげと深く感謝申し上げます。そのことを冒頭に申し上げられなかったのは私のいたらなさです。今後は、慈しみの看護を探究するべく、仏道修行にも努めてまいれることを御誓いいたします。

皆様の益々のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

(現 京都光華女子大学健康科学部長)



(筆者 右端)



## 教育効果と研究成果を目指して

元検査技術科学コース 教授 藤田 正 俊

平成5年4月1日、京都大学医療技術短期大学部に着任して19年間の勤めを終え、平成24年3月31日に定年退任させていただきました。光陰矢の如し、Time flies like an arrow. と洋の東西の諺にある通り、あっという間に年月が経ってしまったと実感しています。

小生在任中は、特に医学の進歩に伴い、医療の現場が大きく変わった時代でした。臨床検査技師の役割にも否応なく変化が訪れ、血液・生化学検査がオートメーション化により時間短縮される一方、生理機能検査は医師主導から臨床検査技師主導へと変遷し、高度な知識と技術を持つ臨床検査技師が求められるようになってきました。そのような需要が増加する中で、各学生の特性に応じた適切な指導を行い、数多くの優秀な人材を全国の医療機関に送り出してきたと自負しています。

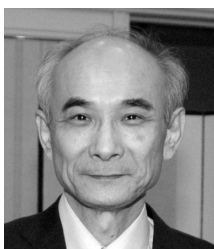
19年間の教育で重視してきたことは、検査法、例えば心電図の講義で学生に教えるには、教科書に書かれていない心電図の原理・原則を如何に解り易く理解させるかに工夫を凝らしました。疾病の病態・生理に関する講義では、単に現象としてではなく、その病態の発生機序を理解できるよう解り易く解説すると、学生の印象に残り、本当の知識として身につくと考えました。

国家試験について触れておきます。健康科学を4年間学んだ証しとして、また、将来の様々な分野での発展への基盤として、国家資格所得は人間健康科学科の学生にとって、最重要課題のひとつと思われます。残念ながら、ここ数年、本校の臨床検査技師国家試験の合格率は全国平均を下回り、低迷していました。入学時のいわゆる学力には遜色がない本校生の国家試験合格率の低さは疑問でした。幸いなことに、今年実施された国家試験の合格率は大幅に上昇しており、それには2つの因子を挙げることができます。教育効果を上げるには従来繰り返し試験をすることが大切だと言われていますが、模擬試験、各教員による過去10年

間の国家試験問題の検討・出題を繰り返し実施したことです。そして最大の要因は、各教員が国家資格の重要性を深く認識し、講義・実習にも改善を加えたことによるものと考えています。まさに、“子は親の背中を見て育つ”の諺通り、教員の統一した姿勢がこの成果を導いたものと嬉しく思っています。

大学院修士・博士課程の設置により、今年3月に本専攻から3名の人間健康科学博士を輩出することができたのは嬉しい限りであります。最終講義でも触れたので、繰り返しになると思いますが、論文作成の秘訣をまとめてみます。三多(看多、做多、商量多)のうち、特に大切なのは関連する論文をすべて隅々まで読破し、自分の研究テーマ分野で、“何が大切で”、“何が明らかになっていないか”を十分認識した上で、研究に着手するのが王道と思われれます。研究の新奇性を強調するには、学会発表と同時またはそれより先に論文投稿を考えるべきです。素晴らしい研究は、統計学的処理を必要としないほどの新しい事実に基づくものと考えています。論文作成にあたってのデータの改ざん、他人の論文(総説)の盗用は論外、二重投稿、分割(スプリット)投稿は慎むべきであり、論文には“哲理と品格”が不可欠です。今後、博士号取得を目指す学生諸君にはそれなりの覚悟と気概が求められます。

多忙な教育、研究、診療の合間に、当専攻の教職員と出場した秋の総長杯テニス大会、真夏の再生医科学研究所とウィルス研究所との三部局対抗ソフトボール大会が鮮烈に脳裡に焼きついています。人生で一番気力・体力が充実した時期を、自由度の高い大学で過ごさせていただいたことに心から感謝しています。最後になりますが、当専攻が地域・社会・産業の発展に貢献する医療専門職を数多く輩出する中心的教育研究機関として大きく前進、展開することを祈っています。



## — 学 兄 —

元検査技術科学コース 准教授 池 本 正 生

平成 24 年 3 月末で京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職し、4 月 1 日付けで天理医療大学医療学部臨床検査学科の教授に着任しました。京都大学では、京都大学医療技術短期大学部と京都大学医学部人間健康科学科における約 31 年間の長きに渡り、滞りなく教員・研究者としての職務を全うさせて頂きましたことに、心から感謝申し上げます。

人と人との出会いの縁というのは不思議なもので、時には人の一生を左右する。私も故村地孝先生とある意味で運命的な出会いから、以降ご指導を賜ることになりました。当時、先生は病態検査学講座(現在の臨床検査医学講座)の教授で臨床検査の若き指導者としてご活躍されていました。村地研究室では、教室の研究者が毎週一回カンファレンスで研究成果について熱く議論を交わすのが恒例で、初めてこのカンファレンスに参加させていただいたとき、研究の厳しさを肌で感じました。それとは裏腹に、大学院での研究経験のない私がこの教室の仲間と一緒に研究しながら、研究者として自立できるのかという不安も正直感じておりました。そのような中で、村地先生から拝受した研究テーマは「ヒト肝臓アルギナーゼの肝障害マーカーとしての有用性に関する研究」でした。当初、牛の肝臓からの精製を試みましたが、うまく進まず暗澹とした気持ちになっているなか、村地先生から論文の別冊が一部学内便で届きました。研究仲間から論文の別冊をいくつか頂いたことがあります。そこには、「謹呈 池本先生、だれだれ」と書かれているだけでした。しかし、先生から頂戴した別冊には、先生のお名前の前に「学兄」と記してあったのです。釈迦に説法かもしれませんが、学兄とは、学問上の先輩のことです。

先生からすれば、私はとても研究者とは言えない若輩者であったに違いありません。それにもかかわらず、同じ学問を志す仲間であり、同士であると認識して頂いたことに対して、身の引き締まる思いがしたことをはっきり覚えています。生化学者としての人格と教授としての品格が目につかぶようでした。不幸にして、先生は退官後間もなく突然逝去され、我々は失意のどん底にありました。大きな支柱を失ったまま葬儀で最後のお別れをしましたが、臨床検査医学分野の黎明期を支えられた先生は、私にとって人生の師匠として一生揺るぎない存在であります。

人は死して何を残すのだろうか。先日、育ての親である上田國寛先生に久しぶりにお会いした。そのとき、真の指導者は何を残すかと尋ねられ、動物は皮を残すといいますが、私は迷わず、「人」ではないですかとお答えした。先生(私のこと)もそれなりの歳になったねと言われ、思わず先生と二人で爆笑しました。京大では多くの先生にご指導いただきましたが、村地先生や上田先生から生化学の基礎を学び、また「人」として、「学者」としてあるべき姿をご教授して頂いたような気がしました。上田先生は自画像の一節で、「研究の本質は、現在存在する原理や事象を越えて存在すべきあるいは存在しうる新しい原理や事象を提示し、それと現在あるものとの関係を明らかにする中で新しい可能性を現実化する方途を限りなく模索することである」と述べられています。私にその資格があるかどうかわかりませんが、新天地でも京都大学で学んだ学問する者の真髓を少しでも継承し、若き人たちと一緒にいつまでも学んでいきたいと思っています。

## 退職の御挨拶

元看護科学コース 准教授 作田裕美

3月31日付で京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コースを退職いたしました。在職中は格別の御懇情を賜り、ここに改めて厚くお礼申し上げます。平成20年4月より4年間という短い期間ではございましたが、大過なく職務を果たせましたのは、ひとえに先生方・事務職員の皆様方のご支援の賜と存じ、心から感謝申し上げます。

官吏の育成を念頭に置く旧東京帝国大学に対し、研究者育成を目的に開学された旧京都帝国大学を祖とする、平成の京都大学において、高度看護実践家、いわゆる実務家育成に携わることができました。国民に直接看護を实践提供していく「がん看護専門看護師」を育成するための「がん看護専門看護師課程」設置を果たせましたことは、感慨深いものがございます。と同時に、学内外の多くの先生方のお力をお借りして、取り組んでまいりましたこの一連の仕事は、私自身を大きく成長させる貴重な体験でもありました。このような貴重な機会を与えていただきましたことに心より感謝申し上げます。

京都大学にこのような実践家育成教育プログラムが誕生した原点は、平成19年4月より開始された文部科学省教育プロジェクト「がんプロフェッショナル養成プラン」でございます。このプロジェクトの専門看護師コースを担当させていただき、世界に名だたる先生方と同じ時間を同じ目標に向かって過ごさせていただきましたことは、私にとってかつて無い体験でございました。日々、新鮮で刺激的で、想像を絶する勉強の機会を与えていただきましたことに深謝いたしております。

このプロジェクトは3月末日で終了し、京都大学は高評価を得ることができました。このプロジェクトに携われましたことを大変誇りに思っております。

組織のマネジメントにおいて、優秀な人材の育成に必要なことは、職務を通じて部下の内奥にMVPを育むことだといわれます。すなわち、Mission(M)、Value(V)、Pride(P)です。自らが所属する組織と取り組むべき職務の理念を共有し、価値を認識しながら、ここに所属し、この職務を成し遂げることに誇りを持つこと。私が過ごした4年間はまさにMVPを自らの血肉のなかに育む体験であったと思っております。

退職後は、4月1日付で大阪市立大学大学院看護学研究科に着任いたしました。大学法人法の施行を契機に、各大学には改革と新生が求められておりますが、大阪府・大阪市では、この度のW選挙によって都構想を掲げる首長が有権者の圧倒的な支持により選出されました。府立大学と市立大学の統合経営などがマニフェストに挙げられており、今まさに大きな変革期を迎えようとしている大学に飛び込んで行くこととなります。変革は、組織に所属する人々を不安にさせますが、教員を含めたすべての職員が積極的に変革期の大学運営に参画する義務があると考えます。将来構想に基づき、私に課せられた役割を認識し、京都大学で育んだMVPを胸に、真摯に教育と研究、大学運営に勤めてまいりたいと考えております。

今後とも御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。末筆ながら先生方の御健勝と御活躍をお祈りしております。

## 退職のご挨拶

元看護科学コース 助教 白井香苗

今年寒い日が続き、桜の開花がいつもより遅くなっています。6年前こちらに着任した年も例年より桜の開花が遅く、着任の1週間後の引越しの際に満開でした。その日は両親も手伝いに来てくれたのですが、荷物整理もソコソコにして、桜を見に出かけたことを昨日のこのように思い出します。今年の桜もきっと入学式頃に見ごろになるのでしょうか。

小学校も何度か出たり入ったりをした自分にとって、6年以上一つ所に所属していた経験はほとんどありませんでした。それほどこちらでの日々は公私ともに楽しく、充実したものであったと思います。

着任して最初の大きな思い出は新入生合宿です。同時に着任した看護の助教のほぼ全員が、右も左もわからないまま「あの山の中」で学生さんと寝食(しかも飯盒炊爨)を共にする……なんちゅうアットホームなトコやねん とビックリしたことを覚えています。

私にとっては初めての教員経験でした。初めて教壇に立った時のこと……いま思い出しても反省することばかりです。。。

初めて学生さんを実習場所に連れていったこと……相当年数現場で経験をしていた保健師業務を、改めて違う立場から見ることができたことも大きな体験です。なにより楽しかったのは、現場の保健師さんと協力して、保健師というシゴトのおもしろさを学生さんに伝えることができたときだと

思います。

自分が実習に連れて行った学生さんたちが、保健師を目指したいと言ってくれたとき、人に教えることはとても労力を必要とするものですが、それがうまくいったときには大きな喜びをもたらすものなのかと実感しました。

一方で、それはとても大きな責任を伴うものであることも自覚しました。私たちは、就職して現場に出て行った学生さんたちからはもちろん、それを受け入れた現場の方たちからも評価されると気付いたからです。

多くの気付きや学びを得ることができたのは、地域看護学講座の桂先生をはじめ、たくさん先生方に温かく見守っていただき、ご指導いただいた経験があったからこそと考えております。いろいろな縁が重なって、初めての教員生活を京都大学で経験できたことは、本当に自分自身の宝となっており、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

4月からは京都府立医科大学に参ります。こちらで学んだことを糧として、さらにパワーアップを図りたいと思っています。近い場所ですし、今後も近辺をウロウロしていることと思います。どうぞさらなるご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

末筆になりましたが、京都大学人間健康科学科のさらなる発展と、先生方のご多幸・ご活躍を祈念して退職の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



## 退職のご挨拶

元検査技術科学コース 特定助教 布 樹 輝

平成 23 年 5 月 31 日付けで京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職いたしました。

京都大学には、2 年間という短い期間ではありますが、在職中に多くの先生方、とくに椎名教授のご支援・ご厚情に心より深く感謝申し上げます。

私にとって京都大学で過ごした日々は、生体医学に携わる教育者・研究者として備えておくべき資質を学んだ貴重な時間であったと考えております。この 2 年間で得た宝物のひとつは、先生方との出会いでした。いつも暖かく、大きな懐で私のことを見守る先生方のご支援があったからこそ、私はしっかりと教育と研究活動に励むことができました。また先生方の姿に学び、自分も先生方のような「大きな」人になりたいと私は思いました。

中国に帰国した今もその信念を貫き、教育の現場で充実した日々を送っております。

さて、私の近況ではございますが、平成 23 年 8 月より、中国西北工業大学航空研究科の講師として、教育と研究に携わっております。今までの研究内容と関連性はございませんが、京都大学で培ったものを土台にして、自分を鍛えなおすつもりで新しい職場で一から頑張る所存でございます。

最後になりますが、京都大学大学院人間健康科学系専攻の末永いご繁栄と、先生方皆様のますますのご活躍をお祈りして、私の退職のご挨拶とさせていただきます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。



## 退任のご挨拶

元看護科学コース 助手 中堀 裕代

昨年10月9日付けで、京都大学医学部人間健康科学科家族看護学講座母性看護・助産学分野の育休代替の助手として着任致しました。そして、短い在任期間でありましたが、本年3月31日付けで退職させていただくこととなりました。初めて教員となり、分からないことばかりで、先生方、事務の方々、実習病院の方々には、ご迷惑をおかけすることが多くありましたが、優しく、ご丁寧なご教示をいただき、心より感謝を申し上げます。また、学部生、大学院生の皆さんからも、多くの学びを私自身がいただき、感謝しております。

私は、平成4年に本学医学部人間健康科学科の前身である医療技術短期大学部助産学特別専攻へ入学し、助産師となり、16年間病院勤務をいたしました。数年前に社会問題として取り上げられた産科医不足、分娩取扱停止は、その当時、私の勤務しておりました病院においても実際に起こりました。しかし、助産師として何もできず、無力さを感じました。助産師は高度専門職であると自負しておりますが、ヨーロッパにおいて専門職は法律家・医師・聖職者をさす用語とされ、また、我が国において労働基準法で国が定める高度な専門知識を有する者は、公認会計士、弁護士、医師、一級建築士、不動産鑑定士などありますが、看護師、保健師、助産師は含まれていません。助産師が専門職として認められ、医療機関の中で、医師やその他の専門職の信頼を得て業務を行なうには、専門職としての知識と技術の修得が必要であり、助産学を学問として確立させる必要があると感じました。学問として確立させるためには、正常な妊娠・分娩・産褥・新生児・乳幼児に関連した健康現象をエビデンス、助産師の経験、対象者の価値観をもって助産診断を行ない、助産ケアをする

必要があります。助産ケアは、まだまだ未開発・未検討であるため、人間集団を対象とした最良の研究で得られた質の高い一般論としてエビデンスを検証していく必要があると考えます。私の力は微力ですが何か少しでも助産学の向上をと考え、大学院進学を決め、本学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コース修士課程に入学いたしました。修士課程においては助産学教育の研究をさせて頂くことができ、先生方、本学及び他大学の助産選択過程の学生の皆さん、共に修士課程を頑張った同級生など多くの方々のおかげで修了でき、教育への関心も高まりました。もともと病院勤務をしていた頃、臨床実習に来られた看護学生・助産師学生の皆さんとの関わりを通して、また、近隣の看護学校へ母性看護技術学の講義・演習に行かせて頂き、教育の楽しさ、学ぶ楽しさは実感しておりましたが、今回、助手となり、あらためて教えることは学ぶことであることを実感いたしました。短い期間で、私自身が未熟であり教育という程のことが出来ていなかったのではないかと思います。実習指導をするにあたり、知識・理論と技術を実践に統合できるように再度学習しました。そして、先生方の指導をそばで見せていただき、聞かせていただき、学生・大学院生の皆さんの学びを共有させていただくことができ、科学的思考力も養うことができたと思います。このような環境をくださった先生方に心より御礼を申し上げます。

次の職場でこの学びを活かし、さらに精進したいと思います。

最後になりましたが、人間健康科学系専攻の益々の御発展を心よりお祈り申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 教授 若村 智子

平成24年4月1日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻基礎看護学講座生活環境看護学分野・教授に就任いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は、昭和56年に本学医学部人間健康科学科の前身である医療技術短期大学部に入学いたしました。卒業後は、京都大学胸部疾患研究所附属病院で6年間看護師として勤務し、平成3年からの2年間は、同短大の看護学科助手として急性期看護実習を担当しました。その後、兵庫県立看護大学開設時から3年間、生活援助看護学の助手として勤務した後、平成8年から5年間、奈良女子大学大学院で研究生活を続け、ヒトの体温調節と概日リズムに関するテーマで平成13年9月に博士(生活環境学)の学位を奈良女子大学から授与されました。

平成13年4月からは、兵庫県立看護大学で3年間講師として勤務し、平成16年4月に、本学の基礎看護学講座に助教授として着任いたしました。平成17年4月からは引き続き准教授として、平成24年3月31日まで、勤務して参りました。

これまでを振り返りますと、教育面では、実習・演習系授業や、卒論・修論指導時には、関係する原著論文・総説・書籍・新聞記事等を基に、教育用資料を作成・編集し、提供してきました。授業で使用した結果を教材の改善にフィードバックさせ、毎年、改訂版を作成してきています。個々の能力に応じ、また個性を認めた態度で接し、個々の潜在的能力を探り、期待されるのびしろが、十分に伸びるよう心掛けてきました。

研究面では、看護師や患者の生活の視点に立ち、光・温度サイクルが生体リズムに与える影響を研究してきました。とりわけ、看護師にとって、交代制勤務(シフトワーク)を通常業務としてこなしつつ、自らの心と体の健康をどのように維持していくのかをテーマに、時間生物学や睡眠科学の視点から研究を開始しています。交代制勤務者(シフトワーカー)の食習慣が朝型・夜型によって異なることを指摘し、追加確認中です。また、日中の仮眠時の姿勢が睡眠の深さに影響することを明らかにしたことは、勤務者にとっては休息になっても、長期療養者にとっては辛い夜を過ごすことになるかもしれないことを指摘しました。更に、北欧人との比較を通して、日本人の季節性反応に関する評価も行っています。

また、看護ケアとしてよく用いられるアロマは、光環境によって自律神経に及ぼす影響が異なることを突き止めました。例えばイライランを暗環境で使用すると副交感神経が亢進され、明環境下では効果がなかったのです。

今後の抱負としては、学部の授業では、これまでの自身の研究プロセスや実績を具体的に例示し、新知識が生まれる過程を、臨場感を持って大切に辿りたいと思っています。また、上記のような研究テーマについて、若い意欲的な学生らと話し合いを重ね、研究成果を挙げていく中で、若手看護研究者の芽を育み、専門家を育成していく所存です。

大学院教育では、徹底したロングミーティングを基本に置き、大学院生がどのようなテーマに興味を持ち、探求しようとしているのか、研究の手法はどうするのか、データをどのように分析するのか、分析結果をまとめ、どのような新知見が得られ、その知見はどのような論文として具現すべきか、研究活動におけるさまざまな局面で綿密に指導できれば幸いに存じます。

今後も、生活の視点を持ったデザインを立て、研究を行いたいと思います。これは、看護師や患者が日常の生活の中で、どのような生活環境(光、食事、社会的環境など)にさらされているのかという“生態学的視点”を1日24時間の中で持ち、そこから、現実に近い重要な環境因子を取り出し、その影響を生理学的対照実験の系に持ち込み、その蓄積を組み合わせることです。そうして、現実に生きる看護師や患者の生活の質の向上に結び付ける方策の確立に繋がりたいと思います。元々看護学は、生活の視点が基本ですので人間の活動の実態での現象に潜む、“因果の糸たち”を生活環境看護学分野の立場から明らかにして行く所存です。

また、これらの研究・教育活動で得られた知見は、睡眠に悩んでおられる方のお役に立てることが体験的にわかってきました。療養者だけでなく、看護師、学生に対して、お役に立てると幸いです。

これまでに引き続き、本学並びに人間健康科学系専攻発展のために、微力ながらも、全力を尽くしてまいります。また、看護を必要とする人々のために、ニーズに応えることのできる看護師を育成するために尽力いたします。今後とも、よろしくご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



## 新任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 教授 山田 重人

平成 24 年 4 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻・理学療法学講座運動機能解析学分野教授を拝命致しましたので、皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成 4 年に京都大学医学部に入学致しました。在学中より、前所属である附属先天異常標本解析センターのヒト胚子標本群に興味を持ち、解剖学第一講座・塩田浩平教授(現副学長・理事)の指導のもとで研究を行っておりました。平成 10 年に卒業後は、京都大学婦人科学産科学教室(藤井信吾教授、現名誉教授、北野病院院長)に入局し、京大病院で NICU(1 ヶ月)、麻酔科(4 ヶ月)を含む 2 年間の研修を行いました。平成 12 年より兵庫県立尼崎病院へ赴任、産婦人科医として忙しくも充実した時間を過ごしました。同院で経験した先天異常症例をきっかけに、やはりもう少し基礎的な研究をしたいと思い、平成 15 年に京都大学大学院医学研究科へと進学しました。婦人科学産科学の大学院生でありましたが、藤井教授のご高配により、先天異常標本解析センターでの研究に従事することができ、ヒト胚の研究(三次元観察およびイメージング)を再開しました。平成 18 年に当時としては珍しい大学院 3 年次終了にて学位を取得した後、アメリカ国立衛生研究所(NIH)・心臓肺血液研究所(NHLBI)の Dr. Cecilia W Lo 博士(現ピッツバーグ大学教授)の研究室にて胚のイメージング法の研究を目的に留学しました。短い期間でしたが、研究だけでなく、アメリカ生活も十分に満喫することができました。

平成 20 年 1 月に帰国後は、先天異常標本解析センターの助教として、ヒト発生学の研究、解剖実習を含む解剖学教育に従事しました。この頃より、先天異常の出生前診断や遺伝医学に興味を持つようになり、小西郁生教授(婦人科学産科学)のご高配により平成 20 年 10 月より京大病院に産科超音波外来を開設、現在に至るまで胎児スクリー

ニングおよび胎児奇形の精査を集中して施行しております。また、当院遺伝子診療部の先生方のご指導のもと、遺伝カウンセリングに関わる機会を得まして、平成 22 年に臨床遺伝専門医資格を取得し、現在は遺伝子診療部の一員として、周産期の遺伝相談にあっております。現在、京都府の産婦人科専門医かつ臨床遺伝専門医は私を含めてわずか 2 名という状況でありますので、出生前・着床前診断といった周産期の難しい領域でも地域に貢献していきたいと考えております。また、小西教授のご推薦を頂き、本年より日本産科婦人科学会・出生前診断ワーキンググループの委員に任命されましたので、日本の出生前医療を考えるという面でも活動していきたいと考えております。

現職着任に際しまして、私のこれまでの基礎研究および臨床医療の経験を生かし、まずは学生教育の充実を図りたいと考えております。早速この 4 月より、私の担当である解剖学講義および実習が始まりました。人間健康科学科における解剖学実習は理学・作業療法学専攻の学生に対してのものが中心で、看護・検査専攻の学生においては時間数も少なく十分とは言えない状況でしたので、人間健康科学科の全ての学生にしっかりと全身の解剖学を身につけてもらうことを目標に、1 学年約 160 人の学生を対象に実習を開始しました。学生の人数が多くて大変な面もありますが、理学・作業の先生方・TA の方々を始めとして、看護・検査の先生方にもご協力いただきまして、順調に実習を進めております。毎回のレポート課題を通じて、学生たちに医学への興味を喚起し、自立した思考を促すことを念頭におき、指導を行っております。これらの試みを通じて、関西地域だけでなく日本の医療・医学研究を支える人材を輩出するべく、まずは解剖学の分野から、講義、実習を通して全力を尽くしたいと思います。今後ともご指導のほど宜しくお願い申し上げます。



## 就任のご挨拶

看護科学コース 准教授 廣島 麻揚

平成24年4月に精神看護学分野の准教授として着任させていただきました。この度このような貴重な機会をいただきまして、着任時のご挨拶をさせていただきます。

私は、平成18年～平成20年に助教として本学に在籍させていただいておりました。当時は臨床看護学講座という臨床基礎、成人慢性期、成人急性期、精神看護学分野からなる講座に所属しておりました。精神看護学以外の分野の先生方と一緒に教育および研究活動をするのはほとんどはじめての経験でしたが、多くの先生方のご支援をいただきまして、看護についてより広くそして深く学ぶことができました。これも講座の先生方はじめ、専攻の先生方、事務職のみなさま、そして病院のみなさまのおかげと大変感謝しております。

この度本専攻に戻ってきたのですが、講座および専攻の先生方はもちろん、恩師である先生方、そして前職場の先生方、さらには家族の支援を受け、戻ってこられました。本当に多くの方の厚いご支援に支えられ、自分が京都大学で再び教育・研究活動に携われますことを深く感謝しております。そして本専攻の使命を再確認し、気を引き締めております。

私にとっての京都大学は、何と言っても自由な校風が大きな魅力のひとつでございます。

看護を含む健康は、人間にとって欠かせないテーマではありますが、医学と比べれば新しい分野になります。真の健康とは何か？、社会全体が真の健康を目指していく際に専門家にできることは何か？教育者・研究者にできることは何か？自由

な発想で先生方と学生さんと一緒に考え、そして実践していきたいと思っております。

私の担当である精神看護においても、自由な発想というのはかなり重要になります。自由な発想の他に、精神疾患をもち困難を抱えた方を支援するには、その人の力を信じる姿勢、あきらめない姿勢も大切になります。なぜか？精神科で臨床経験のある方なら、ご自身の経験を振り返り、理解していただきます。でも多くの人の理解を得たり、発展させていくには、きちんとした論理的根拠が必要です。これらの論理的根拠についても考えていきたいと思っております。

今後の抱負についてになりますが、私のこれまでの経験を生かしさらに発展させ、本専攻の使命を果たすために、次のようなことを重点におき教育および研究活動をしたいと思っております。

まず教育については、「健康に携わる専門家になる」ということがどういうことなのかを学生さんと共に考え学びたいと思っております。そして学生さんのエンパワメントができる教育をしていきたいと思っております。

研究については、「精神障がい者の自己効力感」、「うつ病患者の生活困難感」、「発達障がい児の認知機能および早期鑑別診断」をテーマに取り組んでおります。京都大学で先生方と学生さんにさらなる刺激を受けて、自由な発想で柔軟に研究活動も取り組みたいと思っております。

まだ多くの面で未熟ですので、ご指導およびご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 講師 滝澤 寛子

平成 23 年 8 月 1 日付けで、看護科学コース地域看護学講座講師に着任いたしました。未だに校舎の構造を把握しきれていない私ですが、気が付けば、あと数か月で一年を迎えようとしています。既に、先生方、そして事務の方々には、いろいろお世話になっておりますが、改めてご挨拶申し上げます。

私は千葉大学を卒業後、民間病院の ICU 病棟で看護師として勤務いたしました。心筋梗塞や脳血管疾患の発作を起こして救急搬送されてくる患者さんの看護に携わるなかで、後遺症も軽く退院されていった患者さんが、一年も経たないうちに再び発作を起こして運ばれてくる悲しい出来事に何度か出会いました。なぜこんなことに？……そして気がついたことは、発作を起こす要因が生活の中にあるということです。さらに、発作をくり返す連鎖を断ちきるためには、最初の発作を起こす前にその要因を取り除くことが重要なのではないかと考えるようになりました。そして、そんな活動をしたと思い保健師に転職いたしました。幸いにも生活習慣病の予防活動を担当する機会に恵まれ、啓発活動や健康教育の展開について、どうしたら本当に必要な人に情報を届けることができるか？活用してもらえるか？悩みながら、さまざまな試みを体験させてもらいました。健康教育の活動をどう考えるか行き詰まって母校の扉を叩いたこともあります。それが私を研究活動に導く出会いとなりました。そんな折り、看護の新設校の助手になるお誘いを受け、教育の場に足を踏み入れることになりました。以降、国立、私立、公立の看護新設校の創設期の教育に携わってきました。

その間、「健康教育の活動をどう考えるか？」私自身の疑問と向き合い、研究に取り組んできました。健康教育の目的は何か？それをどう評価するか？を考え、生活習慣病の中でも糖尿病の予防を取り上げて、評価指標の作成を試みたり、健康教育を受けた人が自分のことだけでなく、家族や地域の人々の健康づくりにも関心を寄せ一緒に健康づくりに取り組んでいくことを目指すグループづくりの研究をしてきました。これらの研究では、現場の保健師さんたちと協働し、活動を通して一緒に新たな発見をし、互いに学び合いながら歩んできました。これからも、地域の健康づくりを目指すグループづくりや、地域の健康づくり活動に参加する個人の要因について研究をすすめていきたいと思っています。

教育では、保健師の活動に魅力を感じてもらえる学生が増えることを目下の目標にして、講義を工夫し、実習では学生が目を見たことの背景や意味を伝えることで、その奥深さを理解してもらえよう努力してきました。魅力を感じてくれる学生がいる反面、「大変そう、自分には向いていない」と反応する学生もいて、伝えることの難しさを痛感しています。さまざまな学生の教育に携わる中で、また、保健師を取り巻く社会の変化を受けて、学生が魅力を感じたことを実践できる能力をしっかりと身につけることができる教育の必要性を感じています。本学が保健師教育の選択制に移行する時期に着任できたのもご縁、保健師活動に魅力を感じ、その魅力を感じたことを実践する能力を兼ね備えた学生の育成に尽力して参りたいと思っております。今後とも、ご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 講師 古川 亮子

昨年8月1日付けで着任いたしました古川と申します。着任後から現在までの8か月間、教職員の皆様にお世話になりながら過ごすことが出来ました。大変遅くなりましたが、この場をお借りして着任のご挨拶をさせていただきます。

私は甲信越地域出身で大学・就職は関東で過ごしてまいりました。看護大学を卒業後、助産師として病院勤務を得て、地方の短大・大学で助手として看護教育に携わりました。看護教育の深さと自分の知識・経験のなさを実感し、看護学修士課程で学ぶため渡米しました。卒業後に帰国し、5年間臨床や看護教育につきましたが、自分で研究を展開するにはまだまだ勉強が足りないと感じたため、再度渡米し看護学博士課程で学びなおしました。卒業後、ご縁があって本校に入職することになりました。

日本国内やアメリカへ転居するたびに生まれる新しい土地・人々との出会いは、まさに人生の不思議とでもいうような気がします。特に、地元の高校を卒業して初めて知らない土地で一人暮らしをすることになった大学時代、日本語が全く通じない世界で初めて暮らすことになった大学院時代は、私の人生における第1・2・3の青春といえる日々でした。

大学時代は同じアパートに同学部の友達が住んでいたこともあり、勉強は大変でしたが今思うと本当に楽しい青春時代だったと思います。大学2年生で戴帽式にのぞんだ時は、看護職に就くのだという実感とともに本当に自分がやっていけるのかという不安でいっぱいでした。そして、4年生の看護学実習・地域実習を終えた後に卒業研究や助産学実習を行い、国家試験に迫られてバタバタと大学を卒業してしまいました。卒業後、同敷地内にある大学病院に助産師として勤務しましたが、実際の臨床勤務の厳しさを思い知らされながらも、大学時代の先生・諸先輩・同僚、そしてなんと言っても患者さん達に励まされながら、この職業を選んでよかったと思うことができました。

その後、看護短大・大学の助手になって高等教育の大切さとともに、自分の勉強不足を実感し、厳しいといわれるアメリカで学ぶことを選択しました。渡米前の私の英語レベルはひどいもので、今でも TOEFL や GRE をみると眩暈がするほどです。ただ、選択した大学・地域には日本人がとても少なく、意思疎通するには英語を話さなければ生きていけなかった(強制英語教育環境)ため、

大学での勉強だけでなく、病院で働いたり臨地実習に行ったりできるほどに上達しました。Registered Nurse License も独学で踏ん張ってパスできてから、生活範囲がかなり広くなりました。RN として主に週末の夜勤に産科病棟に勤務し、改めて日本の看護を見直す機会が生まれ、またアメリカの病院システムについて学ぶことができました。看護師として働くこともですが、仕事の合間の同僚との雑談は楽しくて、卒業が決まった後にみんなが送別会を開いてくれた時は、素敵な仲間と働けた嬉しさと遠く離れることの悲しさで涙が出ました。

博士課程の進学を決めた大学は、修士を修了した大学とは違う大学・地域だったので、また一から生活を始めることになりました。博士課程は修士課程に比べて学習内容が雲泥の差で難しかったため、思い出すことといえば左手に本か論文、右手に電子辞書とマーカーを持って読んでいるか、ひたすらパソコンの前に座ってレポートを書いていたことです。そんな息苦しくなる生活を支えてくれたのは、担任・友人そしてアメリカの家族といえる人達でした。担任はとにかくポジティブな性格で、自分が知らないこと(日本独特の風習など)にも興味を持ち、また私の愚痴にも耳を傾けて、私が無事に博士課程を修了する最善の方法をいつも考えてくれました。アメリカの家族と出会うきっかけは留学生センター主催の会でしたが、設定期間が終わった後もずっと側にいて、卒業式には私の家族として両親の代わりに参加してくれ、本当の家族のように支えてくれました。卒業パーティーはアメリカの家族が主催し、担任や友人が訪れてくれ、無事に卒業できた安堵の反面、皆との別れの辛さを再度かみしめました。帰国の飛行機に乗るまで、周囲の人々の“本当に行っちゃうの？”と私自身の“本当に卒業したんだ？”を繰り返しつつ、第二の故郷を旅立ちました。

こうして振り返ってみると、新しい環境に身を置くということは、辛さや苦しみの中から一握りの光や喜びを見出すものだと感じます。雪が解けて桜が花を咲かせるように、人生は刻々と流れていきます。私は教育者としても研究者としても未熟ではありますが、自分がどこにいてどこにいていこうとしているかを自問しながら、本学での教育や研究を通して考えていこうと思っています。今後とも皆様からのご指導を承りたく存じますので、よろしくお願いたします。

## 着任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 講師 山田 純 栄

平成23年10月1日に、リハビリテーション科学コース作業療法学講座に着任いたしました山田純栄です。着任し約6ヶ月経過いたしました。当校の諸システムを把握できず、事務手続きひとつを処理するにも手間取り、授業が始まった4月からは洛中に咲き誇る桜に心寄せる余裕もなく怒涛のような日々が過ぎ去っていきます。毎日慌てふためく私は、先生方や職員の皆様に多方面からのご指導とご支援をいただいております。その内容としては、研究はもちろんのこと、授業や学生指導の工夫、会計システムの入り方やネット環境設定などの庶事にも及んでいます。ご挨拶の文面上で不調法かとは思いますが、兎にも角にもお世話になっている先生方や職員の皆様にお礼申し上げます。

私は学校も臨床も大学での仕事もすべて愛知で納まっておりましたので、このたびの京都への赴任は、初めての郷里を離れての生活になりました。慣れない地で生活を始めるのは煩雑な事柄が多く面倒なものです。でも京都には教科書で見知った史跡や神社仏閣がそこかしこにあり、普段使っている言葉の由来となった物語も身近にあるため、面倒を凌駕する楽しみを感じています。美味しい食べ物や美しい道具、朱が映える建物と大きめの空は、半年経過した今も新鮮に思います。なかでもとりわけ強く新鮮に思い、こころ揺さぶられ、圧倒されたのは、豊かな研究と教育をしている環境に触れたことでした。それも何げなく、日常のこととして、当たり前に行っているのです。私が驚いていると、先生方は“柳は緑花は紅”という風情で逆に私の様子に驚かれます。自分がその環境の構成員のひとりになった恐れと責任にやや押し寄せ気味ですが、いずれ自分も当たり前のことができる者になりたいと思っています。長年、病院や施設で、精神認知機能の障害をもつ方を対象とした臨床に身をおきました。教育経験年数は臨床経験年数を超えていません。研究においても学位を修めて10年も経過していません。臨床についてはある程度のことやものをなし得ても、教育や研究については、前者に及ばないでしょう。しかし、恵まれた環境でこれからの10年を過ごせば、教育でも研究でもある程度のことやものを達成できるのではないかと考えております。

現在取り組んでいる主な研究テーマは早期精神病です。精神障害はいわゆる治らない病気とされてきましたが、発症から治療を受けるまでの期間

を短くすれば、障害による制限は限定可能とされています。ひいては、精神障害を予防できるのではないかとさえ考えられています。本邦では地域限定で啓発を含めた予防的活動が試行されていますが、全国規模で行われるには時期尚早で、精神科医療では精神症状をなるべく早く治め予後をより良くすることに主眼がおかれています。そこで、私の第一の課題は、作業療法は精神症状をなるべく早く治める一助であるという証明です。第二の課題は、予防的側面において作業療法が貢献できることの模索です。作業療法は医師の処方のもとで行われる医療行為ですから、病院を受診しない対象者に触れられません。精神疾患の前駆症状は発症の数年前から現れ、発症から1年以上経過して受診すると言われております。予防を可能にする時期(受診の5~6年ぐらい前との指摘もある)に作業療法士は対象者に出会えないのです。しかし、作業療法士もしくは作業療法の視点が、健康な者たちの生活空間にあれば、長い未治療期間を過ごすことなく、発症によって生じる制限を最小限にできるのではないかと考えています。なぜなら作業療法は日常を構成する諸活動(作業療法業界ではこれを“作業活動”と呼びます)を通して、心身機能や社会機能も分析し評価します。もし精神の病を発症しやすい(思春期や自立を求められる時期)もしくは前駆症状が出始める好発時期に、何かしらの作業活動-たとえば学校で工作をしたり掃除をしたり-をしている様子を観察すれば、発症して間もない者、前駆症状を呈する者、それらを呈しやすいだろう特性を持つ者たちをいち早くみつけられるのではないかと考えるのです。ただし、予防的活動においては、精神障害というスティグマを生むという危惧があり、倫理的配慮がなされるべきです。倫理的配慮を踏まえつつも、当該の研究を推し進め、将来的には精神の病は腫瘍のように早期発見早期治療でいわゆる治る病気として、たとえ障害があったとしても高血圧症のようにうまく付き合っていけば生活の質が保たれた人生がおくれるという事実の証明が、精神の病や障害でつらい思いをする者を減らす手段であり、精神障害がスティグマにならない社会につながると思っています。

私は、京都大学で上述課題を達成できるよう努力してまいりたいと存じます。ご挨拶に便乗し、引き続き、ご指導ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。



## 新任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 助教 岡橋 さやか

平成24年2月1日付けで、リハビリテーション科学コース作業療法学講座の助教として着任いたしました岡橋さやかと申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。一番寒い時期にこちらにきましたが、春となり桜が美しく、自転車で渡る丸太町橋から眺める鴨川と山稜の風景が気に入っています。京都の四季を感じつつ、茶道を再び始めたいと思うこの頃です。

さて、私は金沢大学医学部保健学科を卒業後、地元の奈良県総合リハビリテーションセンター、国保中央病院で作業療法士として勤務いたしました。急性期から回復期、慢性期に至るまで脳血管障害や頭部外傷、整形疾患を中心とした作業療法に携わりました。また、臨床の傍ら神戸大学大学院に進学し、高次脳機能のリハビリテーションに関する研究を続けて参りました。

臨床においては、作業療法士として患者さん個々の目標に向けて、低下した身体機能や高次脳機能に対する機能訓練、日常生活活動(食事、整容、更衣等)についての実際の動作訓練を試行錯誤しながら行う毎日でした。時には、もうすぐ退院予定の患者さんの自宅を訪問し、理学療法士やケアマネージャーと共に住宅改修に関するアドバイスをすることもありました。そんな施設内だけに留まらない家庭・社会生活を視野に入れた訓練と介入にはやりがいを感じる事ができました。臨床7年目に地域の病院において作業療法室の開設に携わる機会を得たことは、私にとって貴重な経験となりました。作業療法において患者さんに提供できることは他の療法とはどう違うのか、他職種に対してどのように説明し、理解してもらえばより円滑に業務連携が図れるのか等について、基本に立ち返って考える機会でもありました。今後私が担当予定の講義には、身体障害作業療法治療学、高齢期作業療法学、日常生活援助法等がありますが、臨床現場で実際に感じたことや考えたことを随時学生に伝えながら展開してゆきたいと思っております。

現在、私の主な研究テーマは「バーチャルリアリティ(VR)技術を用いた高次脳機能リハビリ

テーションシステムの開発」です。これは、私が大学院生時代に医学・工学分野の学生数名と共に始めた研究であり、神戸大学大学院保健学研究科の関啓子先生、同システム情報学研究科の羅志偉先生、長野明紀先生には多くのご指導を頂きました。本研究では、既存の神経心理学的検査や質問紙では捉えることが難しい、患者さんが日常生活上で直面している問題について、VR技術を用いて再現した仮想の日常観察から評価しようとしています。利点は外出等の評価を室内で安全、安価に、定性・定量的に行えることであり、対象には注意や記憶に低下を呈した高次脳機能障害者や高齢者を想定しています。このような最新の工学技術が福祉・リハビリテーション機器に導入されれば、10年後のリハビリテーション室には現在とは違う検査・訓練機器が存在し、さらに自宅と病院を繋いだ遠隔リハビリが容易に利用できる環境が整っているかもしれません。その一端として、患者さんにとってより効果的で、楽しく取り組むことのできるリハビリテーションの新しい方法を生み出すことを目指しています。

ここ数年を振り返ると、臨床においても、研究においても、何か一つの目標に向かって様々な分野の異なる専門家と共に協力して作業することが多くありました。その中で、自己の専門性を高め、確立することの重要性を痛感いたしました。これを今後の課題として日々努力し、その上でより高いレベルでの学術的コミュニケーションを図れるようになりたいと思っております。

私は、昨年度より教育研究機関での仕事を開始しました。初任地は名古屋大学医学部保健学科であり、二年目の現在も大学では初めての業務に出くわします。その度に、周りの先生方よりご教示仰ぎながら徐々に慣れて参りました。駆け出しの教員ではありますが、引き続き一つ一つの仕事に丁寧に取り組んでゆきます。尚、5月より京大病院リハビリテーション科作業療法室において臨床を始める予定です。限られた時間ですが、有意義な臨床の場にできればと思っております。皆様には、今後ともお力添えとご指導を賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。





## 着任のご挨拶

看護科学コース 助教 志澤 美保

平成24年4月1日付けで、京都大学医学部医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コース地域保健看護学講座に助教として着任しました志澤美保です。よろしくお願いいたします。

私は生まれも育ちも京都市で、「鴨川」が「加茂川」と表記が変わる上流の自然豊かな土地で育ちました。そのためか、鴨川が見える場所はとても心が落ち着く風景の一つです。現在は、京都大学への通勤で、毎日、鴨川を眺めるのが私の楽しみの一つとなっています。

私は、京都市立看護短期大学で学んだ後、富山医科薬科大学医学部看護学科に編入し、看護学を学びました。臨床としては、京都市立病院、京都府亀岡市保健センター、京都外国語大学診療室など、病院、行政、学校保健並びに産業保健と様々な看護の現場を経験しました。その経験を踏まえた上で名古屋大学保健学科の地域・在宅看護学講座の助教となりました。その後、教員職から一旦離れ、大学院の博士課程に進学し、この春まで在籍していました。したがって教員としては3年ほどブランクがあります。教員を経験してからの博士課程は様々な意味でとてもいい刺激となりました。学生の立場となり、他の院生仲間と意見交換することで、教員として何を求められているのか、良き導き手としての指導姿勢などを自分なりに考える、良い機会となったと思います。

さて、このように様々な経緯を経て現在に至るわけですが、常に臨床の場で母子に関連する仕事に携わってきたという点では一貫しています。病院では産婦人科、行政では母子保健係、そして大学診療室では思春期保健と職場における母性健康管理などです。このように様々な職場で多様な年代の女性と子どもたちに出会ったことが母子保健の分野を研究するに当たって大いに刺激となりました。

私は特に「食べる」という行為に焦点をあて、看護と心理の領域にまたがる学際的な研究に10

年近く携ってきました。なぜ「食べる」行為に注目したのか。それは、「食べる」ことは生きるために必要不可欠な基本的な行為ですが、文化的・社会的な要素も入っており、ヒトらしい特徴が現れる興味深い行為の一つだからです。また、授乳はヒトの子どもが母親とやりとりを開始する最初の時期でもあります。また、幼少の子どもをもつ母親は、子どもに離乳食を食べさせたり、自分で食べられるようになるまで食べ方を教えたりと、とても重要な役割を担います。このため、そのことで母親たちは「食」に関連する問題に突き当たりやすく、悩んだり、落ち込んだりもします。このような母親を支えるために必要な情報や知識を探索し広めるための研究を心がけてきました。

そのなかで用いてきた手法が行動分析法です。これはもともと動物観察をする際の手法であり、動物の行動生態などを観察し記録するのに有効な手段の一つとなっているものです。この手法の長所は、見てわかる行動そのものをカテゴリー化していくので、言葉を話さない乳幼児期の母子のやりとりを観察する際や、無意識で行っているような行動を発見していくような時などに有効な手法と言えます。愛着評定のストレンジ・シチュエーション法で看護領域でも知られているエインズワースが、この動物行動学から発展させてヒトの愛着研究へと繋げています。行動を丁寧に見ることで気付くことも多くあり、看護の現場においても必要な技術なのではないかと考えています。今後は、実践に向けた視点をより多様に取り入れて、今までの経験や人との繋がりを活かした学際的な研究をさらに探求してゆきたいと考えています。

このたび縁があって、人間健康科学系専攻の教員として赴任することとなり、微力ではありますが、全力で学生指導と研究に携わっていく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、どうかよろしく願いたします。



## 新任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 助教 長谷川 聡

平成24年4月1日付けで、本学医学研究科人間健康科学系専攻運動機能解析学講座の助教に着任いたしました長谷川聡(はせがわさとし)と申します。この度、本紙面をお借りいたしましてご挨拶申し上げます。

私は現在の大阪府立大学の短期大学部を卒業後、神戸大学へ進学し、その後京都の洛和解音羽病院、京都大学医学部附属病院で臨床に従事してまいりました。私は滋賀県出身なもので、思い返すと滋賀・大阪・兵庫・京都と住処を移してきたこととなります。その中でも1番京都という場所が大好きで、天災に見舞われることも少なく、なんといっても、このこじんまりした感じが私にとっては本当に住みやすい土地だと感じています。この京都で仕事できるということは本当に幸せに思っております。

12年間の臨床の中で様々な患者さん、セラピストに出会い、様々な経験をさせていただきました。その経験の中で私は呼吸器疾患のリハビリテーション、スポーツ障害や肩関節疾患のリハビリテーションに興味を持つようになりました。特に呼吸器疾患に関しては、息をするという全てのヒトが何気に日常でしている行為が障害されることによって、呼吸器という組織だけでなく、他の多くの器官、特に我々の深く関わる運動器に対しては非常に大きな影響を与えます。大学病院で勤務していると、この分野での理学療法士の活躍が本当に期待されていることを身に染みて感じています。にもかかわらず、この分野に関しては、臨床、学術的にもわかっていないことだらけで、まだまだ経験に頼って治療が行われている部分が大いと感じています。特に病気とうまくつきあって「人を楽にする。人が楽に動ける。人が楽に運動する。」ということをテーマに研究・臨床には

げみたいと考えています。学生に対しては、呼吸生理、運動生理という難しそうでとっつきにくいテーマをいかにおもしろく伝えていこうかと考えています。

医学研究科人間健康科学系専攻という場所は、看護・検査技術・作業療法・理学療法と多種のコメディカルを養成する場となっております。附属病院で勤務している間もすごく感じていることは、リハビリテーションというものはリハビリスタッフだけで成り立つものでは決してないということです。日々看護師さんに助けられ、正確な検査結果を参考にさせていただき、作業療法士とともに患者さんを治療していく。本当にプロフェッショナルの集団の中で我々理学療法士がもてる知識技術を提供していくという形で臨床業務が成り立っていると強く感じます。各コメディカルスタッフが患者の治療に対する専門知識を高いレベルでもち、それらを発揮できるようなチームの中で仕事できると本当にスムーズに治療が進むでしょうし、実際に強くやりがいを感じます。それを身をもって感じてきました。立場は変わりますが、引き続き臨床という場を大切に、そして今後は学生が理学療法士という職業に希望と誇りを持てるように共に学んでいきたいと思っております。

このたび助教として着任することとなり、本学ならびに人間健康科学系専攻発展のために、微力ながら全力を尽くして参る所存でございます。不慣れなことも多く、至らない点もあるかと思いますが、皆様からのご助言をいただきながら努力してまいります。どうぞよろしく願いいたします。今後ともご指導、ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 着任のごあいさつ

看護科学コース 助手 田中真琴

平成24年4月1日より、育児休暇中の竹之内沙弥香先生に代わりまして、人間健康科学系専攻、生活習慣病看護学講座の助手に着任いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は、この前身である医療技術短期大学部を卒業後、神戸大学に編入学し、卒業後に京大病院へ就職しました。

「石の上にも3年」というから、辛くても3年間だけ京大病院で勉強しよう、と思って働き始めたはずが、3年すると看護がおもしろくなり、勉強してみたいことが増え、気づけば11年働いていました。大学を卒業してからずっと京大病院で働いてきたので、こころで一区切りつけよう、と辞めることを決意し、さて何から始めようかな、と考えていたところ、医療短大の時の同級生である竹之内先生から、このような縁を頂くことができ感謝しています。そして、生活習慣病看護学講座の任教授は、私が医療短大の学生時代から先生として活躍しておられました。京大病院の副部長として京都へ戻ってこられたときには、病棟の一看護師である私の悩みにまでも真剣に向き合っていたことが忘れられません。その任教授のもとで、1年間業務に就くということはとても心強く感じています。

看護師としての11年間で、低出生体重児とその家族へのケア、肝胆膵疾患をもつ患者さんの周手術期のケア、乳がん患者さんのケア、化学療法をうける患者さんのケア、終末期のケア、を勉強させてもらってきました。実のところ、この3月まで南病棟5階で働いていましたし、急性期領域を主に経験してきたと思っていたので、話をいただいたときには、生活習慣病看護学ですか？慢性期ってことですか？と少し戸惑いました。ですが、今までの経験した臨床現場を思い返してみると、どこの病棟で働いていても「疾病をもって生活をしている人」がいらっしゃって、それは生活習慣

病看護に通じるものがあるかな、と考えお引き受けすることにしました。

いただいたこの機会に、私は、今までの看護を振り返り整理していく機会とさせていただこうと考えています。1カ月間が過ぎて、大学では、今まで知り合うことのなかった、たくさんの先輩方にお会いできるところだなと感じました。先生方、いろいろなお話聞かせていただけることを楽しみにしていますので、ご指導どうぞよろしくお願いいたします。

学生のみなさんとは、成人学実習Ⅰ・Ⅱや成人学概論、緩和ケア論などのお手伝いでお目にかかる予定です。看護学を学んでいる先輩として、学びのお手伝いさせてもらうことができればいいなと考えています。前期の授業が始まったので、一緒に授業をうけさせてもらったのですが、学生さんたちを見ていると自分が学生だった頃を思い出し、にやっとしてしまいます。当時のクラスメートを思い出したり、自分はあんな感じだったかな、などと思います。当時の私は、今こうやって戻ってくることを想像していませんでしたし、クラスメートも驚いていることでしょう。なので、お会いする学生さんたちは、これからどんな道にすすんでいくのかな、と興味深く思っています。

私は好奇心旺盛なようで、今年は山登りもしてみたいし、ロッククライミングもしてみたい……。いろいろなことに興味を持つのですが、今のお気に入りは、ダイビングとヨガです。そして、大好きな京都で今年も生活できることを、楽しんでいきたいと思っています。私に興味を持っていた方、気軽に声をかけていただけると嬉しいです。

竹之内先生の代替としては、力およばない点がたくさんあるかと思いますが、1年間どうぞよろしくお願いいたします。

## 第24回(2011年)健康科学市民公開講座

検査技術科学コース 足立 壮一

平成23年11月12日(土)午後「小児白血病治療の進歩と今後の展望」というテーマで第24回健康科学市民公開講座が開催されました。日本では年間2000~2500人の子供が癌と診断され、小児癌は子供の病死原因の第一位であり、小児癌のなかで最も多い白血病は成人白血病と異なり、治癒する患者さんの方が多いこと、長期生存者の合併症は成人になってもフォローする必要があることを、市民に知ってもらうことが大変に重要であると考えたからです。

検査技術科学コース長の杉本教授の開催挨拶のあと、第1講では私から「小児白血病の治療戦略」をテーマに血液に関する基礎から小児白血病治療最先端までの話をしました。特に白血病の治療向上及び合併症軽減のためには、予後因子として、様々な遺伝子変異及び増幅等の検査が非常に重要であり、日本全国の急性骨髄性白血病委員長である私の研究室で検査コース修士学生が行った、最新の研究データを報告しました。第2講では国立病院機構名古屋医療センター臨床研究センター長堀部敬三先生から「多施設共同臨床試験と長期フォロー」をテーマに、より良い治療法を科学的に決めて医療を進歩させるために、日本全国の多くの大学や病院を結集してJPLSG(日本小児白血病研究グループ)を立ち上げたこと、JPLSGのもとで白血病の臨床試験を全国ほとんどの小児がん専門施設が参加して行うことにより、治療成績が向上してきていること、長期生存者の増加とともに、長期フォローの重要性が増していることが述べられました。

第3講では滋賀県立成人病センター研究所画像研究部門総括研究員の東達也先生が「放射線の利用と被ばくーがん、白血病発症との関連も含めて」をテーマに医療被曝や環境放射線汚染による被曝から、放射線治療の影響までを興味深く述べられました。第4講で小児白血病経験者である河村聡氏から「あきらめない心~夢と希望を持ち続けることの大切さ~」と題して、患者側からの貴重な体験をユーモアも交えて語っていただきました。講師の方々は最先端の内容をわかり易くお話下さり、パネルディスカッションでは参加者から質問が相次ぎ、更に理解を深めることができ有意義な会合となりました。

行楽日和の好天候にもかかわらず、約75名が参集して下さり最後まで熱心に聴講され、杉本コース長の閉会挨拶後も各講師に個別に質問される方々もおられました。

以下に60名の方が御回答くださったアンケート調査結果を簡潔にまとめます。

職種内訳は主婦26、医療関係者10、(看護6、薬剤1、内科1、その他2)、教職員4(看護1、養護学級担当1)、会社員4、無職3、大学生2、団体職員1、社会福祉士1、その他9であった。全体的な印象に関しては、大変良かった31、良かった27、普通1、無記入1であった。「患者の立場での発表に共感を覚えた」6、「1演題あたりの時間が短い(休憩が多い)」4、「講義資料を希望」1などの意見が記入されていた。

人間健康の学生(検査コースを始め、看護、リハビリテーションコース)の参加もあり、私が例年、参加している病気のこどもたちと兄弟のキャンプを主催しているYMCAスタッフや患者会のリーダーも交えた有意義な会となり、今後も私が研究代表者である厚生労働省の班研究においても、今回のような市民公開講座を継続していきたいと思っておりますので、皆様のご理解とご協力をよろしく願いたします。



## 2011年度オープンキャンパス

### 検査技術科学コース 足立 壮一

2011年度オープンキャンパスは2011年8月11日に昨年同様、A時間帯、B時間帯の2回にわたって行われました。(表1)全体説明会では、坪山学科長の挨拶のあと、各専攻(看護、検査、理学、作業)の紹介が各コース担当教員からされました。その後、各専攻に分かれて、実習等の体験、研究室との施設見学、学生個別相談が行われ、アンケート調査からも、いずれも好評でした。参加者は表2に示しますが、A時間帯は女子152名、男子36名の計188名、B時間帯は女子98名、男子31名の計129名が参加しました。専攻別では看護109名、検査111名、理学71名、作業20名(未定6名)でした。また、都道府県別では京都43名、大阪43名を始めとして北海道や沖縄からも参加者がありました。事故や病人はありませんでした。来年度も同様のスケジュールで行われる予定で、今後の京都大学人間健康に多くのやる気のある学生のリクルートのために、重要なイベントであると思われます。



表1 全体説明会場：第9講義室(中北棟5階)

A時間帯 (12:30~14:30)		B時間帯 (15:00~17:00)	
12:00	全体説明会受付開始	14:30	全体説明会受付開始
12:30	開会 学科長あいさつ	15:00	開会 学科長あいさつ
12:35	専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)	15:05	専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)
13:00	各専攻別説明会	15:30	各専攻別説明会
	○看護学専攻→→第5講義室		○看護学専攻→→第5講義室
	○検査技術科学専攻→→第8講義室		○検査技術科学専攻→→第8講義室
	○理学療法学専攻→→第7講義室		○理学療法学専攻→→第7講義室
○作業療法学専攻→→第6講義室	○作業療法学専攻→→第6講義室		
★実習等の体験 研究室との施設見学 学生個別相談など		★実習等の体験 研究室との施設見学 学生個別相談など	
14:30	終了	17:00	終了

表2 オープンキャンパス 2011 参加者状況

## ●参加者数

	参加者数		高1		高2		高3		既卒・その他	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A時間帯	152	36	51	19	68	13	30	4	3	0
B時間帯	98	31	40	16	46	10	10	4	2	1
計	250	67	91	35	114	23	40	8	5	1
	317		126		137		48		6	

※既卒・その他=既卒女子4、既卒男子1 中学2年生女子1(A時間帯)

## ●専攻別

	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A時間帯	62	7	49	15	30	13	9	0	2	1
計	69		64		43		9		3	
	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
B時間帯	34	6	37	10	18	10	8	3	1	2
計	40		47		28		11		3	

## ●参加者の都道府県別人数(A・B時間帯合わせた人数)

北海道	1	青森		秋田	1	岩手	1	宮城	1	山形	3
福島	2	茨城	1	千葉	2	栃木		群馬	2	埼玉	3
東京	4	神奈川	3	山梨	2	新潟	2	長野	5	静岡	7
愛知	4	岐阜	5	三重	5	富山	7	石川	1	福井	33
滋賀	28	京都	43	大阪	43	兵庫	31	奈良	20	和歌山	10
徳島	8	香川		愛媛	5	高知	4	岡山	7	広島	10
鳥取	2	島根	2	山口	2	福岡	1	大分		佐賀	2
長崎	1	熊本	1	宮崎	1	鹿児島		沖縄	1		

## ●アンケート用紙(黄色)回収枚数：168

## ●事故や病人の報告：なし

## 人間健康科学系専攻から博士が3名誕生しました

平成24年3月26日、みやこめッセにおいて、沢田敏男元総長をはじめ、各理事・副学長、各部局長等の出席のもとに、大学院学位授与式が行われました。人間健康科学系専攻からは、下記3名に博士(人間健康科学)が授与されました。



### 博士授与者と論文題目

#### 砂川陽一

論文題目：Cyclin-dependent kinase-9 is a component of the p300/GATA4 complex required for phenylephrine-induced hypertrophy in cardiomyocytes

(Cyclin-dependent kinase-9はp300/GATA4と機能的な複合体を形成し、心筋細胞肥大反応に必須である)

#### 亀田知美

論文題目：Digitization of clinical and epidemiological data from the Kyoto Collection of human embryos: maternal risk factors and embryonic malformation

(ヒト胚子の京都コレクションからの臨床的ならびに疫学的資料の電子化：母体危険因子と胚子奇形)

#### 永井宏達

論文題目：Muscle coactivation during postural control in older adults

(高齢者における姿勢制御時の筋の同時活動)

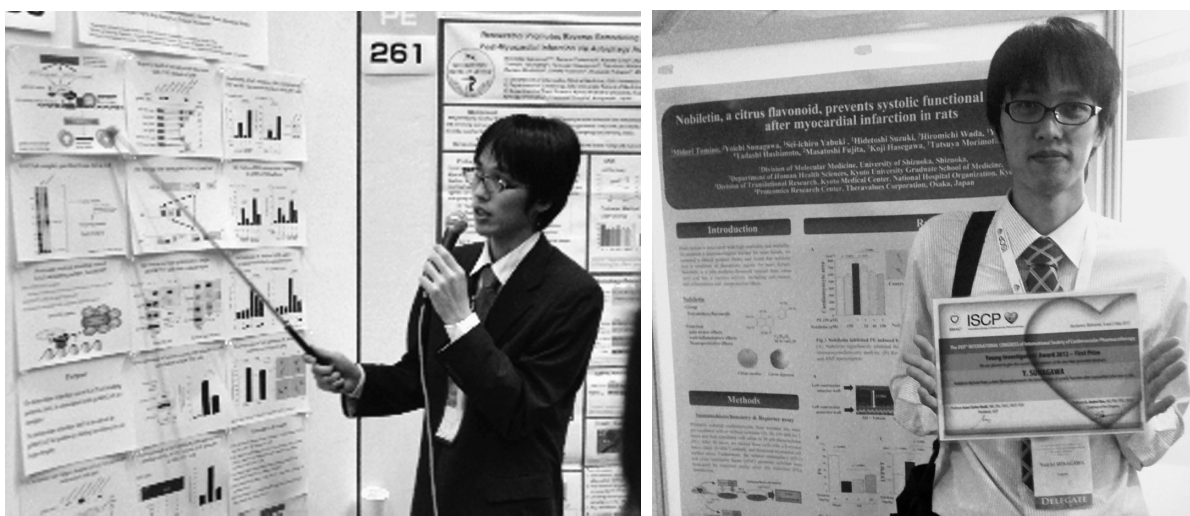
## 課程時代を振り返って

砂川陽一

博士後期課程3年間を振り返ってみますと、苦労はしたけれどもその分、成長もできたのかなあと感じています。以前は京都医療センター臨床研究センターの研究員を務めており、そこから京都大学の博士後期課程へと研究場所を移したのですが、共同研究先にいることがほとんどだったので、実際に行っていること自体はあまり変わっていませんでした。しかし博士ともなるとただ実験をするだけにはいかず、研究外での仕事や後輩の面倒を見なければいけないというのが一番頭を悩ませました。当時私しか実験を教えることが出来る立場の人がいなかったという事情もありましたが、大勢の子に新たなテーマの元、研究指導しなければならず、これらに時間を取られてしまったことで自分の実験を思うように進めることが出来ず己の力不足さを実感しました。でもその分研究に対するディスカッションの機会が増えたことで物事の見方や考える力、いかに効率よく研究を進めていくかマネジメント能力を大いに養わせて頂いたことで少しは成長できたかなと思っています。入学当初と卒業時とでは研究への考え方、取り組み方が良い方へガラリと変わったなと今更ながら思います。先生方からの目から見れば、何をのたまうこの甘ちゃんが、だと感じるでしょうが今後も研究活動頑張っていきます。

また、何度か国際学会で発表する機会が出来たのも良い経験になりました。一番印象に残っているのは2009年11月アメリカ心臓国際学会(AHA)で初めて英語の口頭発表させて頂いたときでしょうか。普段の発表はさほど緊張することはないのですが、異国の地とあってこの時ばかりは非常に緊張し、質疑応答はろくに満足に答えることが出来ず、打ちのめされました。今思えば情けない話ですが、これをいい教訓としてしっかりと前準備を行うことで、緊張しても何とか出来るようにしています。

4月からは共同研究先でもあった静岡県立大学薬学部分子病態学のポスドクとして研究活動に従事しています。近年、ポスドク問題が取り沙汰されており自身の今後について不安になりますが、このご時世どこにいても苦労はつきものだと考えています。好きな研究を続けられる喜びを感じつつも、競争社会に生き抜くことが出来るよう今後とも精一杯努力していきたいと思っています。最後になりましたが、ご指導して頂いた藤田正俊教授をはじめとする先生方に厚くお礼申し上げます。



第17回 ISCP 国際大会にて YIA 受賞(2012年5月ルーマニアにて)



## 大学院生活を振り返って

亀田 知美

私は、京都大学大学院で修士課程・博士課程の5年間を過ごしました。いずれも1期生だったので、1期生ならではの苦労も多く、また、博士課程では看護の院生が私だけだったので、入学当初は研究や院生生活のことを相談できる同期がおらず大変辛かった思い出があります。2回生からは徐々に後輩も増え、院生の交流会や研究の中間発表会が行われるようになり、院生生活が少しずつ充実していきました。また、院生室は領域の区別がなく一緒の部屋で過ごしましたが、それぞれの専門領域の研究について話を聞くことができ、時には朝まで意見を交わすこともあり、私にとって見識を高める場となっていました。また、学位論文の作成や審査の前には、仲間がそばで励まし支えてくれたので、無事卒業することができたと思いと感謝しています。また、看護以外の同期で3人の女子の院生がいましたが、4人とも異なる職種で研究方法も様々だったので、ほぼ毎月開かれた女子会では研究の相談をしたり、被験者として研究に協力することもありました。このように、さまざまな職種や領域で活躍している人が集まり、一緒に学び、お互いを高め支えあえる大切な仲間と出会うことができたのは、4専攻を設置している人間健康科学系専攻だからであり、この専攻を選択し学ぶことができて本当に良かったと思っています。

博士の研究は、修士課程で取り組んだターナー症候群の研究を通じ、先天異常に関してもっと深く学びたいと考え、京都大学大学院医学部附属先天異常標本解析センターにて研究をさせていただきました。そして、センターが所蔵する胚子標本と母体の書誌データを使い、先天異常の発生と母体因子との関係について研究を行いました。センターでは、自分の研究以外にも、免疫染色などマウスやヒト胎児の標本を使った実験や研究も経験させていただきました。また、医学部だけでなく理学部や工学部、海外の研究者と一緒に研究や会話をする機会にも恵まれました。今後、研究を続けるうえで学ぶことがとても多く、貴重な経験をさせていただいたと思います。

現在は、母性・助産学の助教として勤務しています。助産師教育に携わりたいと思い、大学院に進学したので、毎日新しいことばかりで大変ですが、とても充実した日々を過ごしています。これからは大学院で学んだことを糧に、教育と研究の両立を図りながら精進していきたいと思っています。



院生の交流会にて  
(筆者前列右端)



## 人間健康科学系専攻博士後期課程を終えて

永井 宏達

平成24年3月に京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻博士後期課程を修了いたしました、永井宏達と申します。今回、博士後期課程修了者を対象として、このような機会をいただきましたので、私の大学院生活を振り返りながら、ご挨拶申し上げたいと存じます。

私は平成19年4月に人間健康科学系専攻の大学院修士課程に入学いたしました。元々、本学の前身である医療技術短期大学部理学療法学科を卒業し、臨床現場で理学療法士として勤務していたところ、本学に大学院が設置されることを知り、学生時代に担任をされていた玉木彰先生(現：兵庫医療大学)に相談させて頂きました。正直申しまして、その時は、研究の具体的ビジョンがあったわけでは決してありませんでしたが、なんとなく、自分で研究ができるスキルを身につけたことから、大学院への扉をたたいたことを記憶しています。修士課程では、坪山直生先生に指示を仰ぎながら、研究活動に従事いたしました。一期生ということもあり、先輩がいない状況で、手探りの日々でありましたが、多くの先生方のお力添えがあり、また同期の院生と協力し合いながら院生生活を送っていました。ちょうど私が修士課程の時は、大学が耐震工事を進める真っ最中ということもあり、2年間で5回も研究室の引っ越しを経験するという、バタバタした時期でした。あわただしい時期ではありましたが、今思えばとてもよい思い出となっています。修士課程は、研究の大まかな流れや、まとめ方を勉強する場であったように思います。研究というものを初めて自分が中心となって行う中で、研究をデザインし、データを収集し、それをある程度の形にまとめるという、一連の流れについて体験できた、有意義な期間でした。

気が付けば1年半が経過し、自分の進路を決断する時が来ていました。修士課程を終えた後、就職するか、それとも博士課程に進学するか……非常に迷っていました。実は、当初は、一般病院に就職する方が私の中では大きく、そのつもりで就職先も探していました。しかしながら、多くの方に相談させていただく中で、博士課程への進学を決めました。最終的に博士課程への進学を決めたきっかけは何だったかと申しますと、その当時、修士課程の同期で仲の良かった友人と銭湯で語り合っていた時に、進学を誘われたのを機に、前向きに考えるようになったという、不純な動機でした。その友人は、結局、博士課程へは進学しませんでした(笑)。

博士課程に進学してからは、後輩の数も増え、自分の研究フィールドの地盤も固まってきつつありましたので、研究を進めやすい環境になってきていました。私は高齢者の姿勢制御能力の詳細を解明する研究を横断的調査に加えて介入研究としても行っていましたので、到底一人で研究を完結できるものではありませんでした。多くの仲間や先生方と協力しながら、雨の日、風の日、時にはずぶ濡れになりながら、施設に足を運んだ日々は忘れられない思い出となっています。大学院に入るまでは、研究のイメージというと、勉強ができる人がする、一人でコツコツする、といったものでしたが、実際には、チームワークをはじめ、発想力(研究の着想)、企画力(研究デザイン)、交渉力(フィールド確保)、実行力(研究の遂行)、マネジメント力(研究の管理)、プレゼン能力(発表、論文化)など幅広い分野の力、つまりは人間力が要求されるということを何よりも感じました。これは、企業で求められる能力と、なんら変わらないものだと思います。まだまだこれらの能力は未熟ではありますが、博士課程での研究活動を通して、これらの重要性について身をもって体感できたことは、私の人生にとって大きな糧になったと思います。

修士課程と博士課程で異なる点は、「自らの力で学問を前に進めることができるか」という点だと感じています。客観的な審査を受けて、学問に新たな知見を加えることができることが、博士課程をクリアする条件ということになります。その点については、修士のころよりも大きなプレッシャーはあったように思います。その壁は、到底自分一人の力では乗り越えられるものではありません。粘り強く先生方に指導していただいたおかげで、無事、博士課程を修了することができたと感じています。周囲の多くの方々に支えられ、勉強させていただいた5年間でした。

博士課程を終えたことは、ゴールではなく、研究者としてのスタートラインに立ったということだと思います。現在、私は京都橋大学理学療法学科で教員として勤務しています。今後は大学院で学んだ経験を生かしながら、教育活動、研究活動に取り組んでいきたいと思っています。京都大学から近くにおりますので、今後ともご指導ご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

人間健康科学系専攻・人間健康科学科  
平成24年度入学試験結果 及び 平成23年度修了・卒業者数

平成24年度 医学部人間健康科学科入学試験結果

専攻・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護学専攻	前期	70	127	75	73
検査技術科学専攻	前期	37	99	39	39
理学療法学専攻	前期	18	36	19	19
作業療法学専攻	前期	18	47	22	21
合計		143	309	155	152

平成24年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）  
入学試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	28	32 [5]	17 [2]	16 [2]
検査技術科学コース	13	22 [0]	19 [0]	18 [0]
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	4	12 [3]	9 [1]	9 [1]
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	4	7 [2]	6 [2]	6 [2]
合計	49	73 [10]	51 [5]	49 [5]

[ ]の数は、社会人特別選抜(内数)

平成24年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）  
入学試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	12	7	7
検査技術科学コース		4	4	4
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)		6	6	6
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)		4	2	2
合計	15	26	19	19

## 平成23年度 医学部人間健康科学科卒業生数

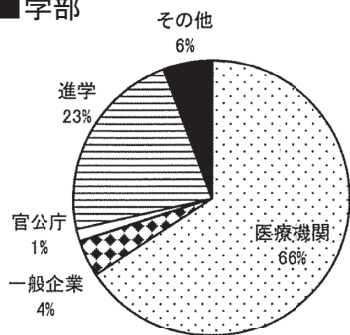
専攻	卒業生数
看護学専攻	69
検査技術科学専攻	40
理学療法学専攻	14
作業療法学専攻	13
合計	136

## 平成23年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース	13
検査技術科学コース	21
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	5
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	3
合計	42

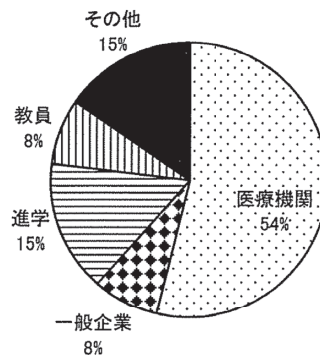
### 平成23年度卒業生の進路調査結果

■学部

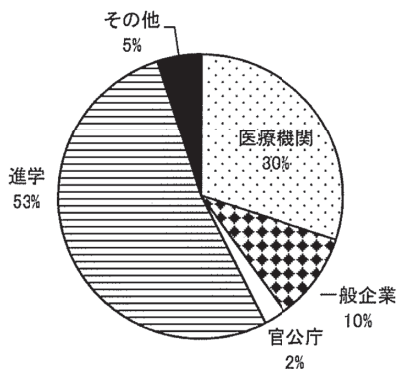


看護学専攻

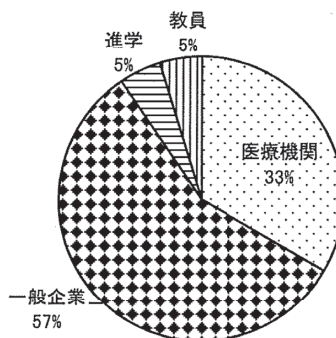
■大学院



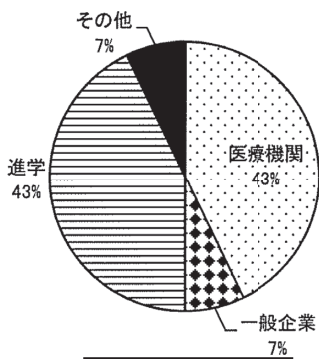
看護科学コース



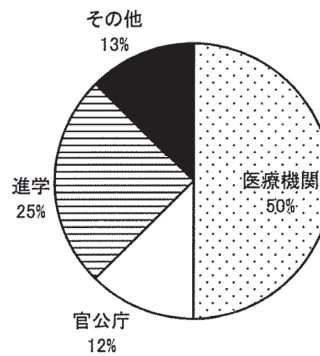
検査技術科学専攻



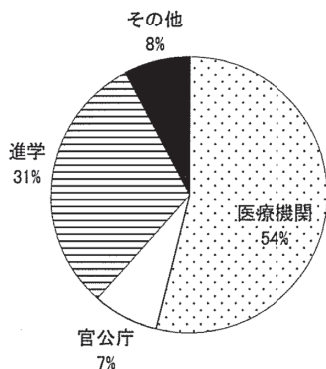
検査技術科学コース



理学療法学専攻



リハビリテーション科学コース



作業療法学専攻

## 人事異動

発令 年月日	職名	氏名	所属	異動事由
平成 23. 5.31	教務担当掛長	藤原輝行	事務部	辞職
23. 6. 1	教務担当掛長	杉本重行	事務部	転入(入試課掛長(入試第一掛)より)
23. 6.30	教授	櫻庭繁	看護科学コース	辞職
23. 8. 1	講師	滝澤寛子	看護科学コース	採用(梅花女子大学看護学部准教授より)
23. 8. 1	講師	古川亮子	看護科学コース	採用
23. 8. 1	助教	竹之内沙弥香	看護科学コース	配置換(助手より)
23. 8. 1	助教	福田里砂	看護科学コース	配置換(助手より)
23. 8.31	教授	石橋誠	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	辞職
23. 9. 1	特定研究員 (特別教育研究)	村上由希	安寧の都市ユニット	採用(特定研究員(厚生科研)より)
23. 9. 1	特定研究員 (特別教育研究)	今村行雄	安寧の都市ユニット	採用(沖縄科学技術研究基盤整備機構研究員より)
23.10. 1	講師	池添冬芽	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	昇任(助教より)
23.10. 1	講師	山田純栄	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	採用(日本福祉大学健康科学部准教授より)
23.10. 1	特定講師 (地域科学技術振興)	酒井晃二	検査技術科学コース	昇任(特定助教より)
23.10. 1	総務担当主任	八代幸造	事務部	転出(奈良教育大学へ)
23.10. 1	総務担当主任	天野香奈子	事務部	転入(情報学研究科主任(総務・教務掛)より)
23.10. 9	助手	中堀裕代	看護科学コース	臨時的任用(宮元産婦人科医院助産師より)
24. 2. 1	助教	岡橋さやか	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	採用(名古屋大学医学部保健学科助教より)
24. 3.31	教授	藤田正俊	検査技術科学コース	定年退職
24. 3.31	教授	齋藤ゆみ	看護科学コース	辞職
24. 3.31	准教授	池本正生	検査技術科学コース	辞職
24. 3.31	准教授	作田裕美	看護科学コース	辞職
24. 3.31	助教	臼井香苗	看護科学コース	辞職
24. 3.31	助手	中堀裕代	看護科学コース	辞職
24. 3.31	特定助教 (改革推進)	仲口路子	看護科学コース	任期満了
24. 4. 1	教授	若村智子	看護科学コース	昇任(准教授より)
24. 4. 1	教授	山田重人	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	昇任(医学研究科准教授より)
24. 4. 1	准教授	廣島麻揚	看護科学コース	採用(西武文理大学看護学部講師より)
24. 4. 1	助教	志澤美保	看護科学コース	採用(大阪大学博士課程より)
24. 4. 1	助教	長谷川聡	リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	採用(京大病院理学療法士より)
24. 4. 1	助手	田中真琴	看護科学コース	臨時的任用(京大病院看護師より)
24. 4. 1	教務担当	谷藤真紀	事務部	転出(施設部企画課(施設契約掛)へ)
24. 4. 1	教務担当	杉本由紀	事務部	採用(新規)

## 目 誌

23.4.6	「安寧の都市ユニット」開講式	7.27	執行部会議
4. 7	学部入学式	7.28	医学研究科専攻長会議
	医系懇談会		
	大学院入学式	8. 1	安寧の都市ユニット運営協議会
	学部新入生ガイダンス	8. 4	入試委員会
	病院協議会	8.10	執行部会議
4.13	執行部会議	8.11	オープンキャンパス
4.14	医学部・医学研究科将来計画検討委員会	8.19	3年次編入学試験
	医学研究科会議・医学教授会	8.23	大学院修士課程入学試験
	教務・教育委員会		
4.16	平成23年度新入生合宿研修(～17日)	9. 1	入試委員会
4.18	拡大執行部会議		臨時教授会議
4.21	教員会議		病院協議会
	教授会		夏祭り
4.27	執行部会議	9. 7	執行部会議
4.28	医学研究科専攻長会議	9. 8	医学研究科将来計画検討委員会
			医学部教授会
5. 6	病院協議会		医学研究科会議・医学教授会
5.12	医学研究科将来計画検討委員会		教務・教育委員会
	医学研究科会議・医学教授会	9. 9	大学院修士課程入学試験合格発表
	教務・教育委員会		3年次編入学試験合格発表
5.13	執行部会議	9.12	拡大執行部会議
5.16	拡大執行部会議	9.13	安寧の都市ユニット運営協議会
5.19	教員会議	9.15	教員会議
	教授会		教授会
5.20	第48回臨床検査技師教育協議会	9.21	執行部会議
5.23	安寧の都市ユニット運営協議会	9.22	医学研究科専攻長会議
5.25	執行部会議		
5.26	医学研究科専攻長会議	10. 6	医系懇談会
			入試委員会
6. 2	病院協議会		病院協議会
6. 5	第5回国立大学保健医療学系代表者協議会	10.12	執行部会議
	看護学分科会		健康管理講演会
6. 6	第6回国立大学保健医療学系代表者協議会	10.13	医学研究科会議・医学教授会
6. 8	執行部会議		教務・教育委員会
6. 9	医学研究科会議・医学教授会	10.17	安寧の都市ユニット運営協議会
	教務・教育委員会		拡大執行部会議
6.13	拡大執行部会議	10.20	教員会議
6.16	教員会議		教授会
	教授会議	10.26	執行部会議
6.18	創立記念日	10.27	医学研究科専攻長会議
	大学院説明会	10.30	京大関係病院長協議会定例総会
	〔リハビリテーション科学コース〕		
6.22	執行部会議	11. 1	大学院博士後期課程入学試験
6.23	医学研究科専攻長会議	11. 4	病院協議会
6.24	平成23年度全国国立大学法人助産師教育	11. 9	執行部会議
	専任教員会議	11.10	医学研究科会議・医学教授会
6.27	安寧の都市ユニット運営協議会		教務・教育委員会
		11.12	第24回健康科学市民公開講座
7. 7	医系懇談会	11.14	拡大執行部会議
	病院協議会	11.17	入試委員会
	入試委員会		教員会議
7.13	執行部会議		教授会
7.14	医学研究科会議・医学教授会	11.21	安寧の都市ユニット運営協議会
	教務・教育委員会	11.23	11月祭(～26日)
7.15	拡大執行部会議	11.24	執行部会議
7.16	大学院説明会〔検査技術科学コース〕		医学研究科専攻長会議
7.21	教員会議	11.25	大学院博士後期課程入学試験合格発表
	教授会		

## 目 誌

- |         |                           |      |                    |
|---------|---------------------------|------|--------------------|
| 23.12.1 | 病院協議会                     | 3. 1 | 臨時教授会              |
| 12. 7   | 執行部会議                     |      | 病院協議会              |
| 12. 8   | 医学研究科会議・医学教授会<br>教務・教育委員会 | 3. 7 | 執行部会議              |
| 12.12   | 拡大執行部会議                   | 3. 8 | 入試委員会              |
| 12.13   | 臨床実習指導者会議                 |      | 臨時教授会              |
| 12.15   | 教員会議                      |      | 医学部教授会             |
|         | 教授会                       |      | 医学研究科専攻長会議         |
| 12.20   | 安寧の都市ユニット運営協議会            |      | 医学研究科会議・医学教授会      |
| 12.21   | 執行部会議                     | 3. 9 | 個別(2次)学力検査合格発表     |
| 12.22   | 医学研究科専攻長会議                | 3.10 | 杉浦地域医療研究センターシンポジウム |
| 24.1.4  | 人間健康科学系専攻新年挨拶会            | 3.12 | 拡大執行部会議            |
| 1. 5    | 病院協議会                     | 3.15 | 教員会議               |
| 1.11    | 執行部会議                     |      | 教授会                |
| 1.12    | 医学研究科会議・医学教授会<br>教務・教育委員会 | 3.21 | 執行部会議              |
| 1.14    | 大学入試センター試験(～15日)          | 3.22 | 医学研究科専攻長会議         |
| 1.16    | 安寧の都市ユニット運営協議会            |      | 医学研究科会議・医学教授会      |
| 1.18    | 執行部会議                     | 3.26 | 大学院学位授与式           |
| 1.19    | 臨床実習指導者会議                 |      | 修士修了を祝う会           |
| 1.23    | 拡大執行部会議                   | 3.27 | 学部卒業式              |
|         | 五〇会総会(新年会)                |      |                    |
|         | 入試委員会                     |      |                    |
| 1.25    | 医系懇談会                     |      |                    |
| 1.26    | 医学研究科専攻長会議                |      |                    |
|         | 医学研究科会議・医学教授会             |      |                    |
|         | 教員会議                      |      |                    |
|         | 教授会                       |      |                    |
| 2. 2    | 病院協議会                     |      |                    |
| 2. 8    | 執行部会議                     |      |                    |
| 2. 9    | 医学研究科会議・医学教授会<br>教務・教育委員会 |      |                    |
| 2.13    | 拡大執行部会議                   |      |                    |
| 2.16    | 教員会議                      |      |                    |
|         | 教授会                       |      |                    |
| 2.17    | 安寧の都市ユニット運営協議会            |      |                    |
| 2.22    | 執行部会議                     |      |                    |
| 2.23    | 医学研究科専攻長会議                |      |                    |
|         | 医学研究科会議・医学教授会             |      |                    |
| 2.25    | 個別(2次)学力検査(～26日)          |      |                    |



## あとがき

2012年3月、初めて3名の博士(人間健康科学)が本専攻から誕生しました。医学、医科学専攻と同等の審査基準を満たしたものです。彼らは3年間の間に査読のある国際的学術誌に筆頭著者として原著論文を公表し、また学位審査に合格しました。私は、一教員として、このことを誇りに思うとともに、将来の活躍を願ってやみません。

短大から4年生大学に移行し、学生の質は大きく変わりました。入試の難易度が高くなったのは事実です。しかし、私たち教員が忘れてはならないのは、わが専攻の評価は、入試の難しさで決まるのではなく、輩出した人材の質で決まるという

ことです。

“人間健康科学”博士が誕生し、私たちの専攻は、ようやく一つの区切りを迎えました。次の段階として、大学院教育、研究のより一層の充実が求められるでしょう。そのためには、教育、研究体制を改善していかななくてはなりません。すぐれた“人間健康科学”博士が多数輩出され、実績を重ね、“人間健康科学”が世間に認知されるようになって欲しいと思います。

(高 桑 徹 也)

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53  
<http://www.hs.med.kyoto-u.ac.jp/>